

満州で生まれ育った私

神奈川県 谷澤 淳

一 満州一家

わが家の満州での生活は、滋賀県の田舎の百姓暮らしを嫌った一人っ子の祖父が、大陸に憧れ故郷を捨て、日露戦争後設立された南満州鉄道株式会社へ職を得たのに始まる。私がこの世に生を受けた時には、祖父をはじめ父の兄弟姉妹七人（男四人、女三人）全員が満州でそれぞれ生計を立てており、私の父も満鉄に勤務していた。ちなみに私の兄弟姉妹八人（男五人、女三人）もすべて満州で生を受け、私は第三子で長男である。

二 時代とともに生きる

私は撫順の満鉄病院で生まれ、父の転勤により橋頭、新京（長春）、大進と居を変え、小学校三年生の時から哈爾濱市南崗区の満鉄社宅に居を定めた。

昭和十四（一九三九）年、ノモンハン事件の時は哈爾濱花園小学校六年生であり、先生に引率されて幾度か哈爾濱駅頭に戦死した英霊のお迎えに参列したものである。

昭和十六年にドイツ軍のソ連進入が始まり、九月に関東軍特別演習（関特演）、十二月に大東亜戦争に突入した時は、哈爾濱中学校二年生であった。関東軍の強い影響下にあった当時の哈爾濱中学は、戦闘帽、巻脚絆で登校し、一年から厳しい軍事教練があり、三年になると三十八式歩兵銃を持った野外演習まで行われた。在学中種々の勤労奉仕が課せられたが、十九年八月には水曲龍開拓団に一カ月間動員された。この開拓団は長野県出身で、各家庭に一人ずつ宿泊しその家の農業を手伝うもので、一週間ずつ移動した。中には応召で一家の主人が不在の家もあり、非常に喜ばれた。

三 戦争末期の勤労働員

九月に入ると、我々在満中学生も内地の生徒並みに通年動員されることとなり、私のクラスは東満国境虎林の第二六三九部隊に派遣されることとなった。「第

二六三九部隊石田隊ヌ」というのが我々が配属になった部隊で、「ヌ」というのは学徒班のことである。ここでは完全な軍隊の内務班生活を強いられ、班長の伏見軍曹の下に杉山兵長、諏訪上等兵の二人の古兵が配属され、我々学徒は星一つない階級で二等兵の下に位置づけられた。事実営内では、二等兵に会うと敬礼しなければならず、二等兵は戸惑いながらもニコニコして答礼してくれたものだ。

内務班の生活は厳しい。朝六時の起床ラッパ、点呼に始まり就寝ラッパまで完全な軍隊生活で、学徒班が兵隊と異なるのは、訓練や営内勤務の代わりに勤労作業があることだ。飯上げ、風呂当番、不寝番、班長や古兵の世話など交代でさせられる。作業は虎林要塞の周辺に掘り廻らされる戦車壕掘りだ。当時、虎林要塞は略々完成されていて、要塞には内地から移設したといわれるケーブルカーも望見できた。我々は、見たこともないソ連の大型戦車を落下させるための壕掘り、日課であり、それも当時の日本軍のこと、「つるはし」「ショベル」「もっこ」を使う人海戦だ。説明による

と、作戦命令により期日までに突貫工事で完成させねばならない。最初は、ショベルで掘った土を後方（前方はソ連側）へ積み上げる作業が続き、私は三日もすると背中が痛くなり、背中の皮が突っ張ってショベルが持てなくなった。軍医の診断の結果「練兵休三日」と宣告され、三日間兵舎で寝込む羽目に陥ったのである。この作業は連日突貫工事で進められ、十一月に入り夜間表土が凍結し始めると「つるはし」で掘り起こして強行され、完成された。

その後は酷寒の中、石油の入ったドラム缶の貨車積み作業が日課となった。関特演で溜め込んだ石油を、風雲急を告げる南方戦線へ送るのだという。吹雪の日の作業は特に辛かった。昼間積み込みを終えた貨車は、夜陰を利して発車する。ある日班長に集められ、我々が苦勞して積み込んだドラム缶が満州から朝鮮半島に入る間に、かなりの漏油が認められると言われた。当時ガソリンの一滴は血の一滴と言われていた時代だ。我々は、国のため一身を投げうって懸命に働いたものだ。班長の敵命で作業は丁寧に行われることに

なったが、漏油はあまり減らなかつたという。当時の日本のドラム缶の品質が劣悪だったということであろう。私はこの作業中、吹雪の中で右手中指を負傷した。早速医務室へ飛んで行ったが、医務室には常時軍医はおらず、衛生曹長が横柄な態度で私をあしらった。私の挨拶の仕方が悪いと言つてすぐに治療せず、私は痛む指を抑えて長時間待たされたのを思い起す。

二六三九部隊の思い出で書き落とせないのは、「空腹」であろう。当時第一線の部隊と同じ待遇ということであつたが、我々はいくら食べても腹が減る。「学徒班、何か要望があるか？」と時に将校から聞かれることがあるが、学徒班の答えはいつも決まっていた。全員腹が減つてしょうがないのである。食べ盛り少年が重労働に明け暮れるのであるから、当然のことである。確かにその度に食事の量は増やされたが、飯盒に大盛りの飯を食べても、最後まで満足感が湧かなかつたことも事実である。部隊側の配慮で、午後三時におやつが出ることとなり、飯上げ当番が受け取りに行く

ことになった。南瓜なぼくやか馬鈴薯の蒸したものであつたが、当番の途中でのつまみ食いも公然の役得であつた。

年末に帰宅を許された我々は、明けて二十年一月から遼陽の火薬工場へ動員されることになった。遼陽でも規律正しい寮生活であつたが、内務班生活とは異なり、軍需工場とは言つても軍隊ではないので、虎林のような理屈抜きの不合理性は少なくなつた。ここでは、九七式方形黄色火薬という特攻隊用の火薬を製造していた。火薬という爆発物を扱うため、破碎、溶融、切断、包装の各工場が高い盛土で分断されており、各工場間の連絡はトロッキで結ばれていた。工場は少数の徴用工が監督でいるのみで、大阪の花柳界の女性であつた女子挺身隊と中学校（哈爾濱、鞍山）、女学校（新京、奉天、鞍山）の動員生徒で運営されていた。中学生は破碎、溶融、切断の各工場に配属され、女子挺身隊は切断、包装両工場、女学生は包装工場に配属されていた。戦時下の工場は昼も夜もない。我々中学生は、一週間毎に昼勤と夜勤が逆転する厳し

い労働を求められ、日曜日に交代勤務の調整をする。つまり一週間は正午十二時に昼食をとるが、次の一週間は夜の十二時が昼食となる。現在では考えられない過酷な労働を強いられたものだが、当時の純情な軍国少年は、「お国のため」と何の疑問も持たなかった。否、疑問を持つとうとしなかった。さすがに女学生には夜勤はなかった。私は切断工場に配属されたので、女子挺身隊の人達と一緒に作業することになった。彼女たちはよくおしゃべりをする。時々配給のお菓子を我々に持って来てくれるのはありがたかった。遼陽の工場は労働の厳しさにも増して、黄色火柴の公害もひどかった。この黄色火柴で我々は全身が黄色に染まり、見ることができぬが内臓も真黄色になってしまった。洋服も染めたように黄色になってしまった。最初は咳が出るが、そのうちに慣れてしまう。三月末に動員が解除され、哈爾濱へ帰る車中で途中乗車客（中国人）が増えてきた時、我々が一斉に衣服をはたき火柴の黄色い粉を舞い上がらせると、中国人が皆慌てて隣の車両に逃げて行ったことを思い起こす。

三月末帰宅した我々は、戦時中の特例措置で五年生、四年生の異例の同時卒業式が行われた。私は五年で卒業したのだが、内地の中学生が卒業後もそのまま動員延期となったため、日本の高校や専門学校へ入学した者は、同様に動員延期となった。満州国立大学等に入学した級友が、それぞれ四月に各大学へ進学したのをよそめに、私は旅順高校に入学したため引き続き動員されることになった。

動員延期組は、当時哈爾濱に新設された満州飛行機の北機械製作所へ勤務するよう指示された。今回は自宅からの通勤で、特に私は仕事も事務であり、虎林や遼陽の場合に比べて格段に楽であった。この工場では、陸軍の九七式戦闘機を生産していた。御承知のとおり、九七式戦闘機といえば脚を胴体に収納できない旧型機で、確かノモンハン事件当時の第一線機である。しかも驚いたことは、エンジン工場で作っていたこの旧型機の気筒が、工作機械の精度が劣るためか、未熟練工のせいか、八割方検査に不合格となる。このような状態で造られた九七式戦闘機は、もちろん特攻

隊用である。工場に隣接する飛行場には特攻隊員が待機していて、戦闘機の出来上がるのを待っていた。私も一度、できたばかりの九七戦に乗って飛び立つ鉢巻姿の特攻隊員を、遙かに見送ったことがある。今思い出しても胸の痛む風景である。

ここで暫時筆がそれるのをお許し願いたい。平成元年、私は機会あって鹿児島県の知覧を訪ねたことがある。今次大戦末期陸軍特攻基地のあった所である。知覧の特攻記念館には、陸軍特攻機の出撃状況が詳しく記録されており、満州からの九七戦による出撃記録が確かにあった。私はこの出撃記録に見入りながら、涙を抑えることができなかった。

四 終戦時および戦後の混乱

昭和二十年七月、ようやく憧れの旅順高等学校に入學した私は、本当に授業が始まったので嬉しくてたまらなかった。当時二年生は大連の満鉄鉄道工場等に動員されていたので、学校には一年生のみが在學していたが、旅順高校は全寮制であり、乏しい食料の中で結構楽しい日々を送ることができた。だがこれも束の間

の静寂に過ぎなかった。八月九日、ソ連軍の満州侵攻が始まり、校舎の近くに防空壕掘りが始まった。これを完成する間もなく、十二月から次々と召集令状が舞い込んできた。十二日朝、第一陣を寮歌を歌って送り出した。当時十七歳になった男子は、全て第二国民兵として登録されていたが、召集は十八歳になった者に発令されたように思う。

十四日、未召集の寮生全員が、十五日午後二時旅順の部隊に入營することになった。当日の寮の昼食は、さすがに当時としては立派なものだったと思う。私は、ちは当日「特別放送」のあることを承知していたが、入營直前のことであり、どうせソ連に対する宣戦布告で国民の気持ちを一層引き締めるものに違いない、それより腹ごしらえとばかり昼食をばくついていた。だが旅順に自宅のある生徒が最期の昼食に帰宅し、そこで「玉音放送」を聞き急ぎ寮に戻り終戦を告げたので、食堂は收拾のつかない大混乱に陥ってしまった。

学校当局は、ソ連軍の進駐して来る前に帰宅できる者は帰宅させる方針をとったので、私は直ちに大連の伯

父宅へ移った。十六日、伯父はしばらく様子を見るよう強く主張したが、私は決して無理をしないと約して大連駅へ向かった。大連駅は人で溢れていた。大連へ動員されていた旅順高校二年生も、多数たむろしていた。私は、その中に哈爾濱中学出身の福原稔郎、黒沢慶治両先輩を見出し、三人で相談の結果、奉天（瀋陽）行きの夜行列車に乗ることにした。ソ連軍はまだ哈爾濱まで進出していないこと、列車は奉天までとまっているが奉天から先も現在運行されている、という駅員の言葉で決心した次第である。この時私のリュックサックの中には、万一の場合に備えて学校農園で無断でもぎ取った青い林檎がぎっしり詰まっていた。

仮眠から目覚め早朝の窓外へ目をやった私は、思わず我が目を疑った。沿線の部落に、青天白日旗が翻っているのではないか。この時、昨日の敗戦のショックを現実肌に感じた。列車は不定期運行ながら、翌十七日朝、奉天駅に着いた。駅員に尋ねると、時間は未定だが新京までは運行されているので、そのままホーム

で待てと言う。待つこと五、六時間、この間奉天で下車した同窓生から大量のおむすびの差し入れがあり、仲間の友情に感激ひとしおであった。ようやく発車した新京行き夜行列車に乗り、翌十八日朝新京駅に着く。新京駅構内は意外に静まりかえっていた。慣れというものは恐ろしい。新京で下車した同窓生の差し入れを頂戴し、哈爾濱行き列車を凶太く待ち、夕刻には哈爾濱行き夜行列車の人となっていたのである。

新京を発って一時間も経ったであろうか、列車が停車したまま動かない。どこだかさっぱりわからない。そのうち、中国人乗客がぞろぞろ前の車両に移動し始めた。何か様子がおかしい。一人の中国人をつかまえて尋ねてみると、乗客が多すぎて汽車が動かぬと言う。どうやら車両を半分に減らすらしい。もちろん私たちが乗っていたのは後半部である。ちょうど新京で差し入れられた弁当を頬張っていた私たちは、大急ぎで外へ飛び出したが、既に前半部の車両は何と屋根まで超満員、炭水車、石炭の上にも乗っている。どうしようもない。終戦直後の混乱時、こんな所で野宿した

らどうなるやら分からない。すると日本婦人が、やはり途方に暮れて私たちに助けを求めて来た。見ると乳飲み子を背負い、片手に幼児の手をひいているではないか。とにかく何とかしなければならぬ。私はもう一度車両を全部入念に見て歩き、一人でも乗れないか必死の思いで走り回る。すると不思議なことに前から二両目の車両が一見がら空きで、扉、窓を固く閉ざしてひっそり静まりかえっている。満鉄車両は台車が高く、中をのぞくことが出来ない。私は黒沢氏に肩車してもらい、車内をのぞく。するとどうであろう、中は軍服を来た日本軍人ばかりではないか。私は窓硝子を割れんばかりにたたたく。一人の兵士が窓を開け「何だ、日本人か」と言う。もちろん、間髪をいれず私を車内に引き上げてくれた。続いて黒沢氏、福原氏と素早く引き入れてくれて、すぐ窓を閉じた。気付いた中国人が外で騒ぎ始めたが、窓を固く閉ざして沈黙、列車は程なく発車した。ほんの束の間のことである。それにしてはあの日本婦人はどうしたであろうか、今でも思い出すと胸が痛む。

十九日朝、列車は願郷屯駅に止まったまま動かない。最初はさほど気にしなかったが、あまりに長すぎる。状況把握に走ると、どうやら哈爾濱駅にソ連軍が進駐し、列車の運行を止めているらしい。願郷屯は哈爾濱の一つ手前の駅である。私たちは相談の結果、ここから歩いて家へ向かうことにした。このようにして私たち三人は無事それぞれの自宅に帰り着いたのである。当時、特急「あじあ号」で十二時間のところを三日がかりであったが、元気に家族と再会できて喜びに浸ったものである。自宅に落ち着いてラジオのスイッチを入れると、満州国の解体と皇帝溥儀の退位を、繰り返し放送していた。また日本軍兵士の哈爾濱郊外香坊駅集合と、そこでの武装解除の放送も繰り返されていた。

二十日、いよいよソ連軍の哈爾濱入城という。愚かにも、私はニュース映画で見た松井石根將軍の南京入城式における馬上の雄姿を思い起こし、独ソ戦で活躍したソ連の大型戦車を見物するような軽い気持ちで、中学時代の級友宮川達郎、今泉孝二両君と共に市内へ

ソ連軍の見物に出かけた。もちろん母は強く外出に反対したが、私は戦争は終わったと意に介しなかった。

市内霽紅橋の手前に、一台のソ連軍戦車が止まっていた。突然三人組のソ連兵が現れて、自動小銃を構え「ダワイ、ダワイ」と叫ぶ。私たちはとっさに両手を高く挙げて止まった。まずお金、腕時計、万年筆を強奪された。この時点でも私は、まだ捕らわれた実感を持たなかった。目ぼしい物を取り上げたら釈放されると軽く考えていたのであった。だが、橋を渡った右手の空き地に連れ込まれ、拘束されたままだ。そのうち日本人男子が次々と連行されて来るに及び、観念せざるを得なかった。よく見ると、ソ連兵は中国人男子の子供を使い、日本人と中国人を見分けている。子供たちは日本人の男子を見つけては、大声で「ヤボンスキー、ヤボンスキー」とはやし立て、ソ連兵からなにがしかの小銭をせしめていた。

夏の日は長い。明るい中に数百人に膨れ上がった日本人は、隊列を組まされ香坊へ向けて行進させられた。長時間の拘束で尿意を催した私は、身振り手振り

でソ連兵に説明し、列外に出て立小便をした。その時、別のソ連兵が飛んできて、何か大声でわめきながら自動小銃を私に突きつけた。とっさに私の小便は途中で止まり、隊列へ走り戻った。香坊駅は日本人で溢れていた。日が暮れ、やっと通訳が現れ整理が始まった。白系ロシア人の若者とおぼしき通訳は甲高い声を張り上げ、「将校は前へ」と叫ぶ。日本人の動きは鈍い。「将校は将校の待遇」、再び通訳は怒鳴る。人々は動き始める。当然次は「下士官」、続いて通訳は「単なる兵士」と叫ぶ。私達は動かなかった。すると件の通訳が飛んで来て「お前たちは何だ」。私は旅順高校の生徒証を示し、学生であることを告げた。彼はそれに一瞥をくれただけで「単なる兵士、こっちへ」。私の耳には、あの通訳の甲高い「単なる兵士」の叫び声がかぎりついて離れない。

こうして集められた日本の捕虜を満載した貨車の列が、何本も後になり先になりして牡丹江^{ポダンキョウ}方面へ向かう。途中の駅では、こうした列車が何本も待ち合わせ、次々に知った顔に出会う。驚いたことに中学の恩

師牧島校長にもお目にかかった。私の目撃した日本の兵士は、この真夏に新品の冬服を着用、背囊にはぎっしり食料が詰められていた。彼らは飢えた文無しの私達に、気前よく乾パンなどを放り投げてくれた。私達はこうした食料と停車のたびに近くの畑からネギなどを失敬してかじり、飢えを凌いだ。

帽児山ボウジザンの駅に着いた時である。ここで駅の構内放送があり、満鉄社員は解放されて哈爾濱に返送されるという。鉄道輸送業務に必要と、満鉄側の交渉が成立したためである。私たちは指をくわえて、ホームに整列する満鉄社員を眺めていた。すると、忙しそうに走り回っている一人の駅員を目にした私は、驚きの声をあげた。当時帽児山駅長を勤めておられた父の友人矢野正夫氏で（令息 尚君は中学の同級生）、私もよく存じ上げていた。当然私はするがる思いで矢野氏に声をかけた。氏はさすがにびっくりされたが、すぐに事情を察し、私に多くを語らせず、満鉄社員の一団の中に入れてくれたのである。こうして私は、哈爾濱へ戻る満鉄社員一同と一緒に車中の人となった。今度はソ連兵

の監視もつかず、満鉄側で食料も用意してくれる。だが次々と行き交う日本の捕虜を満載した貨車の列を見るにつけ、満鉄社員でない私が、このまま哈爾濱に戻る危険を感じた。これまでの私と違って、今度は極めて慎重になっていたのである。私は一つ手前の三棵樹サンカド駅で降り、私の両親が媒酌をし、親戚付き合いをしてきた岡虎雄氏宅に潜伏した。ここから満鉄に勤める父に連絡をつけてもらい、満鉄社員証と腕章（ロシア語で鉄道員を表示し外出時着用する）を作成してもらい、やっとわが家へ帰り着いたのであった。何とソ連兵に捕まって一カ月近く経っていたのである。余談であるが、この時私は全身「虱」にとりつかれており、母は私の無事生還を喜び、笑顔で私の衣類を煮沸していた。この事件は後に「日本人狩り」とか「男狩り」といわれており、九月上旬まで行われ、民間人二万数千人が捕らえられたという。ほとんどが牡丹江へ送られ、各種使役に服したが、大半は十月に入り順次釈放された。

明けて昭和二十一年四月末、急ぎソ連軍が撤退を

始め、代わって中共軍が進駐してきた。それまで駐在していた少数の国民政府軍と官吏は、いつの間にか姿を消していた。中共軍は市の郊外から一人ずつ少し間隔をとり、時間をかけて市内へ進入して来た。服装はまちまちで、携帯する武器も日本製の三八式歩兵銃から米国製自動小銃まで種々雑多で、総じて古い武器が多く、身なりも粗末であった。中共軍は当時「八路軍」と言われ、前評判は必ずしも良くなかったが、身なりに反し軍規は極めて厳正で、「人民自衛軍」の腕章をつけていた。この腕章は間もなく「民主聯軍」に変わったが、いずれにしてもソ連軍のひどさを知る私どもは、安堵の胸を撫で下ろしたのであった。

五月初旬のことである。当時中国では、東北地区へ全面進駐しようとする国府軍と、これに抵抗する中共軍との間で、厳しい戦闘が繰り返されていた。戦況は明らかに中共側に不利であった。この時、中共当局による日本人の組織的徴用が始まったのである。徴用は日本人の隣組組織を通じて行われ、隣組の各班毎に一人の割り当てであった。早速各隣組で協議が行われた

が、もちろん希望者はほとんど出なかった。敗戦後各地で厳しい生活を余儀なくされている一家の主人が、応募できるはずがない。私は隣の班の中学の同窓生の上原英敏君と語らい、自発的に組長に申し出た。組長が喜んだのは言うまでもない。徴用の目的は、国府軍に破壊された長春市の復興作業と説明されたが、誰もが半信半疑であった。徴用日本人で組織された作業部隊は早速長春へ向かった。だが、案の定長春には破壊の跡が見られない。長春には一泊し、何の説明もないまま、また貨車に乗せられ、当時国府軍と対峙していた四平街へ向かうと言う。どうやら作業内容は弾丸運びらしい。行き交う貨車には、負傷した中共兵が満載されて、うめいている。これは危険だ。

列車は公主嶺コウシユレイ駅に暫時停車した。駅には、上原君のハル濱学院の同僚が通訳として勤めていた。彼もこれから先は危険だと言う。ぐずぐずしては命を落とす。三人で相談、脱走することにした。まず、私たち二人は便所に入り列車の出るのを待つ。二人の所属する班長には、私たち二人の脱走をあらかじめ告げて了

解をとり、列車が駅を発車したら、信号灯の下に二人の荷物を落としてもらうことにした。護衛の中共兵に発見されぬように事を運ばねばならぬ。二人は便所の中（もちろん大きい方）に入り、息を殺す。間もなく列車は遠ざかる。上原君の同僚が迎えに来るまでの時間、実際はものの数分であつたろうが、私には実に長く心臓の凍る思いがした。「上原君！」と言う彼の声で二人は便所から出、三人で荷物を拾い、脱走に成功した。その夜は彼の家に泊めてもらい、翌日長春に戻って私の叔父宅に一泊し、長春からは検車区員になりすまして、無事哈爾濱へ帰り着いたのであつた。私たち二人の帰宅を知つた隣組の組長は、驚いて私の家へ飛んで来たが、母が偽りの徴用に強く抗議すると「当分外出を控えるように」とだけ言い残して退去した。この強制徴用は第一次から第三次にかけて、総勢三千六百人の日本人男子が動員されたが、中共軍が敗走中のことだっただけに、現地での確な指示が得られず、多少の雑役に従事しただけで哈爾濱に逃げ帰つてきた。私は、この第一次徴用組に入れられていたので

ある。

五 祖国への引揚げ

八月に入ると、在留日本人を母国へ引き揚げさせるため、アメリカの仲介により国共内戦が一時休戦となり、下旬いよいよ引揚げが開始された。私たち一家十人にも早々に引揚げの指示が出た。持って帰れる荷物は厳しく制限され、もちろん自分で持てる範囲だ。母は、布団袋で私用に特製の大きなリュックサックをこしらえてくれた。哈爾濱駅では厳重な手荷物検査があり、私は大事にしていた英和辞典と独和辞典を持っていったが、独和辞典は「ドイツ語は駄目」と没収されてしまった。祖国へ一刻も早く帰りたい一心で、私はあえて逆らわなかったが、最も大事にしていた英和辞典が没収されたときには、「これは英語です」と抗議すると直ちに返してくれた。話がそれるが、この辞書は今も記念に大事に保管している。

中共側が用意した列車は有蓋貨車であり、駅ホームには随所に「新日本建設」等のビラが貼られていた。

列車が陶頼昭トウライショウ駅に到着すると全員降ろされ、第二松シヨウ

花江^{カコウ}の河畔まで線路沿いに歩かされた。私は、あらかじめ用意していた天秤棒で幼い弟妹の荷物も担ぎ、河畔へ急いだ。河畔へ着くと弟たちに荷物番をさせ、私はまた引き返した。当時五歳になる妹が、母に手を引かれてとぼとぼ歩いていたので迎えに戻ったのである。案の定、母と妹は私の姿を見つけ歓声をあげて喜んでくれた。私は妹を背負い、母を助けて弟たちの待つ川岸へと急いだのだった。

当時国共内戦で敗色の濃かった中共軍は、第二松花江にかかる鉄橋を爆破して、国府軍と対峙していた。私たちは米軍上陸用舟艇で河を渡り、対岸に国府側が用意した列車に乗った。今度は無蓋貨車である。長春の収容所で約一週間、そしていよいよ葫蘆島^{コクトウ}へ向かう。この時用意された列車に連結されていた車両は、通称フラットという台車だけの貨車であった。私たちは、安全のため車内側面に荷物を縛りつけ、人間がその中に座るようにし、しかも男性が外側に座るようにした。さらに夜間の外部からの盗難を防ぐため、男性は交代で不寝番を務めた。葫蘆島の収容所は日本人で

溢れていた。なかなか乗船の順番が回ってこない。やっと乗船することができたのは、哈爾濱を出発して一カ月も経ってからであった。当時船舶の不足する日本は、海外からの引き揚げに米軍LST(Landing Ship of Tank)を多く利用していたようであるが、私達は幸運にも貨物船「日昌丸」に乗船することとなった。いよいよ乗船となり、船側に近づいて感激した。舷側に大きな「日の丸」が描かれていたのである。当時敗戦国日本は、国旗「日の丸」の使用を禁止されていたが、外洋船は国籍を明示するために特に使用を認められていたようだ。高揚した気分で舷梯を登ると、船員が「ご苦労さん」「お帰り」などと声を掛けてくれ、もう外国ではないのだと、安堵と歓喜の感情に浸ってしまった。

日昌丸は順調に航海をして、佐世保港に入港した。だが、検便の結果、我々の上陸許可はなかなか下りない。検便の度に、コレラ菌の保菌者が出たのである。検便といっても、今では想像もできないやり方なのである。医者と看護婦が一組となっている(もちろん医

者は椅子に座っている)前に並び、一人ずつその前に行き下半身裸になって尻を突き出すのだ。医者が硝子棒を肛門に突き入れて出し、看護婦に渡す。もちろん男女別に船の甲板上で行うのだが、この場景、今思ひ出すとむしろ滑稽ですらある。検便の結果、コレラ菌保菌者が一人でも出ると全員一週間上陸延期となり、また一週間後に検便からの繰り返しで、私たちは結局一カ月も船内に留め置かれてしまったのであった。

この一カ月、狭い船上での生活は何もすることがない。日昌丸は、貨物船を外地からの引揚げ用に船倉を改装したもので、蚕棚のような狭い所で生活するのだ。食事は朝夕二食、玄麦の雑炊である。一人前が茶碗に軽く二杯、腹が減ってどうしようもない。当時の日本国内は主食の遅配、欠配が続ぎ、毎日二食ちゃんと支給されるのは引揚船だからだと、船員は恩着せがましく言う。私はすることもないまま、父が万一の場合に備えてリュックサックの中に忍ばせていた釣り具があることに気付き、雑炊の玄麦を餌に船上から投げ釣りを始めた。十五〜二十センチのフグが結構釣れ

た。釣り上げたフグはすぐにナイフで三枚におろし、身だけにして甲板に干すのだ。海水で洗って干した、この「フグの一夜干し」はそのまま食べても結構うまい。問題は干している「フグ」がすぐ盗まれることである。兄弟の多いわが家では、弟たちを交代で見張り番に立てた。それでも末弟などは、目の前で強引に盗まれたという。

十月二十一日、佐世保港の浦頭埠頭に上陸した。哈爾濱を出発して、ちょうど二カ月経つての祖国への帰国であった。

六 引揚げ後の生活

一人っ子の祖父が故郷を捨てて渡満したわが家には、帰るべき故郷も家もない。従つて父の兄弟姉妹はすべて配偶者の出身地へ落ち着くこととなった。わが家も母の故郷である大阪へ落ち着くこととなった。大阪では、叔母が自動車修理工場を経営していた。叔母は、わが家の一家十人が揃つて元気に引き揚げて来たのを喜んで受け入れてくれたが、後に私に語ったところでは、喜びの裏に大きな困惑を感じていたようだ。

私たちが叔母宅になだれこんだ後、当時食事の遅配、欠配の続く中、叔母は白米の御飯と味噌汁その他、私たちが口にできないご馳走を出してくれた。我々の住居として、工場の倉庫として使用していた建物の二階をも提供してくれた。叔母の口利きで姉二人の仕事も見つかり、私は当然叔母の工場を手伝うこととなった。中学の弟二人は、朝新聞配達をしてから学校に通った。だが、私はどうしても進学の希望を捨て去ることができなかつた。周囲に反対の声の大きい中、父母は私の希望を認め、応援してくれた。

昭和二十二年九月、私は大阪高等学校へ転入学を認められた。喜んで転入学の手続きに登校した私は、学校当局から必要書類を受け取ってびっくりした。中に日本育英会宛の「奨学金申請書」と「引揚学徒授業料免除願い」の二つの書類を見出したからである。前者は私も申請するつもりでいたが、後者については全く知らなかつたので、びっくりすると共に、転入学試験時の面接で私の個人的事情を知る学校当局の温かい配慮に、涙が出るほど嬉しかつた。入寮すると、寮には

特に引揚学徒が多く、その大半は旅順高校の同窓生であつた。授業料と共に食費を除く寮費も免除になり、頂いた奨学金で寮の食費は賅えた。もちろん、家庭教師をはじめ種々アルバイトをした。このようにして私にもやっと戦後の落ち着いた生活が始まつたのである。

七 祖國日本

今や齡よわい夙もとに古希を過ぎ、静かに熟年生活を送る身となつたが、顧みると満州で生まれ、日本を知らずに満州で育つた私は、終戦までは満州が私の故郷だと思つてゐた。祖父の代から満州に移り住み、主要都市に親戚が居住し、哈爾濱に住む私は小学校高学年になると、夏休みには新京、奉天、大連と親族宅を訪ねるのが楽しみに一つでもあつた。大学だけは祖國日本で卒業し、また満州へ戻るのは自分の当然の運命と素直に思つてゐた。日本の敗戦により私の運命も変わってしまった訳であるが、改めて祖國日本と日本人として生まれたことのありがたさを噛みしめている毎日である。私はその後無事大学を卒業し、就職難の中、旧財

関係重工業会社に入社し、役員まで務めて退いた。これまでにお世話になった人は数知れない。特に敗戦直後は思わぬ巡り合わせで、思わぬ人々にお世話になった。これだけは忘れてはならないと思っている。

ハルビンの鐘

富山県 村澤隆 司

一、私のおいたち

私は大正十四（一九二五）年九月、富山県の片田舎で父金造、母やよいの次男として生まれた。家は農家であったが、父は農業の傍ら当時の北陸タイムス社に勤めていて、朝早く畑仕事をしてから新聞社に出掛けしていた。その後、父が帰ってくるまで母が一人で農作業をするという毎日であった。私は子供のころは、村の神社とかお寺とかでよく遊んでいた。遊び仲間の上田君が餓鬼大将でその次が私だったが二人は仲良かった。

昭和十二（一九三七）年七月、支那事変がぼつ発して、村からも召集で戦地に行く人が多くなってきた。私たちが日の丸小旗を打ち振って見送ったものだった。それから世間はだんだんと軍国調になってきて、昭和十三年四月には国家総動員法が施行され、生活必需品の統制によって配給制度が始まった。当時、村にはまだ文盲の人がいて、父はよく戦地への便りの代筆や、戦地から来た手紙を読んであげたりして随分と喜ばれていた。

私が高等科一年生の時に、友人の上口君から相談があると言われて、何事かと思いい話を聞いたところ、「僕は、満蒙開拓義勇軍に応募して満州開拓に行く。君はどうか」ということだった。三年間の現地訓練が終わると、土地が与えられて独立して大きな農場経営者になれるし、国がこれを助成しているという事も話してくれた。彼も農家の三男坊であった。私はその話を聞いて、「自分も近い将来には義勇軍に入ろう。そして大地主になって何頭もの牛や馬で耕作して、穀物や野菜をたくさん作ろう」と決心した。農家の次男で